
捨てね娘

凪澤 唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てね娘

【ISBN】

9788421Y

【作者名】

凧澤 唯人

【あらすじ】

平凡な高校生活
なにも変わらない生活のなかを生きる男子生徒、ササクラ 笹倉真琴
そんな真琴の幼なじみの性格最悪、自分に逆らえる男子はいないと
言う女王様、クルス 来栖深雪
ネコナエ
謎の女の子 猫苗柚子

そんな三人がひょんなことから出会い、ひょんなことからゆるーい

詐欺をし始める。

そんなコメディ。

*

作者、素人のために文才に疎い部分があります……

それでも大丈夫な方、お読みください……

詐欺と言いましても、政治や株は絡まない高校生ができる範疇での
ゆるーい詐欺です。

風が冷たい

最近は暖冬だとが言つけれど、甚だ疑問である。

首に巻いたマフラーの隙間から伸びる、携帯音楽プレイヤーのコードを指でいじくり回しながらの帰路。

普段は学校がある時間帯なのだが、今日は県民の日と重なっているので休みなのだ。

ずっと家でじっくりしていると、仕事で夜まで帰って来ない親のせいで毎飯をコンビニに買いに行つた帰り。

商店街と自分の住む地区を繋ぐ長めの橋をだらだらと歩いていると、行きには反対側を歩いたから気づかなかつた段ボールがポツリ。

中からせきを離れて、さうして、心地のいい匂がある。

先ほど買って来た買い物袋のなかから半額で安売りされていた、魚肉ソーセージを出して段ボールに近づく。

案の定中には子猫が一匹。俺が覗き込むと明らかに敵意剥き出しで、箱の隅で毛布にくるまつていてる。

「なんだよ、怖がることないだろ」

自分は昔から動物には好かれないらしい。散歩中の犬には吠えられ、飼っていたハムスターには必ず指を噛まれ、仕舞いには動物園の動物達から威嚇される。

悪いことをした記憶はないのに、だ。

「……まあ……ほうよ」

いつまでたつても近寄つて来ない猫を見ていると段々と悲しくなつてきたので、ソーセージを段ボールに放り込むと立ち上がる。

猫はいまだに警戒しているが、ソーセージを見ると「ひらり」と見ながらちょいちょいと手を伸ばしている。俺はそんな猫を見ながら少し和み、再び橋を渡りきりうつ歩き始めた。

しばらく歩いているともう少し先に段ボールがもう一個。しかし何故か違和感が拭えない。

誰がどうみても明らかに違和感。俺は一応、あくまでも一応先ほどと同じように魚肉ソーセージを取り出して近づいて行く。

「…………」

段ボールの中の生き物は「ひらり」と見ると直ぐ様ソーセージに気付く、明らかに期待した目をキラキラとさせながら「ひらり」を見ている。

俺だつて鬼ではない、先ほどより好意的な生き物に少しだけ嬉しそうに頬が弛んだかもしれない顔を擦りながらイヤホンを外し、ソーセージをその生き物の口元にちか寄せる。

すると、驚いたことにその生き物はソーセージを手で掴み、器用に食べ始めたのだ。しかもそれだけではない。

「…………美味しい」

喋つたのである。

「……」でその生き物を見ながら考えた。インコだつて喋る。猿だつて手で掴み食べる。あり得ないことではないのだ。もちろん、人間

はこれらを両立しているが、寒空の中段ボールに入つて震えること
はない。……とは一概には言えないが、大体はそのうので人間のせ
んはない。

ではなにか。

わからぬので立ち去ることにした。

「…ま、待つてください…」

今、なにか聴こえた気がするが気のせいだ。イヤホンを再び耳に
はめれば幻聴は止み、家についたら全部わすれる。

「あ…」

イヤホンをつけてからだ、何故か目の前を先ほどの生き物がぴょ
んぴょんと跳ね回っている。まるでなにかを伝えようとしているよ

うだが、幻覚なのでスルー。

寒さが肌に刺さるようだという表現があるが、それと酷似したものだと考へることにした。寒さが網膜と鼓膜を刺激し、あらん幻想を見せている、といふことだ。

「むうう…とりやつ」

イヤホンがその生き物によつて無理やり引き取られた、がそれはきっと風が吹いたのだろう。多分イヤホンの部分だけを鎌鼬的ななにかが吹き抜けたのだ。

「えへへ、無視するから取つちゃいましたっ」

やばい、死ぬのかもしれない。

幻想が度を過ぎてゐる。

あれか？今日が休みだからといって、昨晩夜更かしをしてゲームをやつてたからか？

それなら納得が……できる説がない。

「…あーゅーモンキー？」

とりあえず全国で使われている英語を自分なりに駆使して「コンタクトしてみた。余談だが英語は進級はできる、といあきつぎりである。そもそも英語つて役に立つか？

……閑話休題

「も、モンキー！？えと、あの、のーモンキー」

「ひの言葉は理解できるひしく、なこせうぶんぶんと顔を振りながらやう言うとジリジリとこひらに詰め寄つて来やがる。宇宙人？ＵＭＡ？とりあえず、怖い。

「えと、『めんなさい…』」

ひらとしてみればそちらが嫌な訳で、いつ捕食されるかもわからないので顔を逸らしながらとつあえず謝ると、全力でその場から走つた。

「つーど、どこ行くんですか！」

急に走られると不意をつかれたらひしく一気に差は広まる。後ろチラリと振り返るとなにやら大きなキャスター・バッグを派手に転がしながらこひらを追いかけて来てやがる。

しかし、俺をなめておひつては困る。伊達に急げ者の真髄とは呼ばれてはいないのだよつ！

しづらへ独走状態をキープをしていた筈なのだが、

「とつやつーーー！」

……気づいたら後ろからかなり勢いよく体当たりをくらいい、買い物袋に入っていた卵を絶対に割られないようひと手で自分を犠牲にして守りながら派手にこけていた。

自分を犠牲した成果として、卵は守れたのだが尋常じやないくらい頬が痛い。顔の横をぎりぎりでガードレールがあり、どうやらそれにかすつたらしい。血で濡れているのがよく分かる。

「ふふふ、逃がしませんっ」

「いや、ふざけんな

うつ伏せに倒れる俺の上に馬乗りになりながら笑ってやがる。腰の辺りに乗りながらぐわんぐわんと揺れながらじらうの背中に手をおいて「じうみえても音速の……いや、光速の……ゆずゆずとは呼ばれてないのですっ」と明らかに今作つたよつなことを言にながじらうの顔を覗きこんでくる。

「……おつ」

「猿だとか、人を見た田で判断しかや……血がでますっ！」

全くこちらの話を聞く様子はない。ただ一人で慌てながら茶色い髪の毛をぱたぱたと揺らしながら焦つてている。つーか、お前のせいで、間違いなく。

というか恥ずかしい。人目とかそういう問題ではなく単純にこんな格好と言うのがある。そう思いながら身体をよじらせていると上でがつしりと態勢を保ちながらなんかぶつぶつ言つてゐる憎き生き物の顔が近づいてきた。

「えと、えと、応急措置しなきゃっつーー。」

その直後、頬こじりつとした感触。

応急措置という項目で傷口を

ペロリと舐められた。

じつやう動物に嫌われ、『捨て猫』に嫌われるらしいが、『捨て
ね娘』には好かれる体质らしい。

ふるるーぐ（後書き）

ふー、疲れたー

素人だけど頑張ってきた気がする。

お読みいただきありがとうございます。

よかつたら次回も温かい目で見守ってください…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842y/>

捨てね娘

2011年11月26日16時45分発行